

ボランティア精神を貫いた医師

及川 栄

一八九六年（明治二十九年）旧暦の六月十五日（現在の五月五日）、三陸大津波が発生した。岩手県沿岸を中心とした大津波である。ところによっては四十メートル近くの高さの大波が襲い、岩手県を中心として二十万人以上の尊い命が奪われる大惨事となった。百年以上の前の出来事である。この惨事の際に、献身的な医療活動を行ったのが江刺郡岩谷堂（現・江刺区岩谷堂）で外科の開業医をしていた及川栄である。

その大惨事は、ゆるやかな地震（長周期地震）、震度にするところから三程度のものから始まった。端午の節句（現在は五月五日）の祝い事を各家庭で楽しんでいた午後七時のことだった。五分間ほどにも及ぶ長い地震だったため津波を予想した人もあった。しかし、はじめ多少の潮位の変動があったが、大きな揺れではなかったため心配する人は少なかった。初めの揺れから一時間ほどたっただろうか、突然の轟音が響いたのだ。大津波の襲来だった。団欒中の家庭

を大波は呑み込んだ。何度もその大波は押し寄せ、沿岸の多くの家屋は全壊した。津波に呑み込まれた人々は、そのほとんどが溺死ではなく、壊れた家屋の残骸に衝突したことによる外傷が致命傷となって命を落とした。かろうじて助かった人々の多くは、泥の混じった潮水を飲み、



三陸大津波による被害の様子

さらに骨が露出するなどの深く重い傷を負っていた。まさに、地獄であった。傷病者を救うはずの地元の医師もまた、津波に飲まれ、救いの手は他に頼るしかない状況であった。近隣の医師が駆けつけたが、手のつけようのない惨状に絶望感を抱き、帰ってしまう状況であった。

岩谷堂の町で外科の開業医を営む及川栄医師がこの報を知ったのは、二日後の十七日であった。外科医が天職と思っていた栄は、すぐさま救援に向かおうと、ありったけの薬品と機器を準備した。さらに、胆江郡役所（現・水沢地方振興局）に救護体制をとるよう要請するとともに、近隣の医師にも救援を要請した。

栄はこの惨事の十年以上前から、日本赤十字社の正社員として活動していた。赤十字社の、「分けへだてなく、万人の生命を尊重する」という理念は心得ていたはずである。しかし、その理念を行動に移すことは、正社員といえども当時はなかなかできるものではなかっただろう。

そして十八日、いよいよ救援に向かう栄医師。当時は自動車などない。馬での移動である。大きな被害を受けていると思われる気仙郡（現大船渡市）へ、馬に乗り向かう。藤里、人首を経由し、姥石峠（種山）を通り現地へ向かうが、この日は暑い日だった。馬もこの暑さに音を上げた。世田米（現・住田町の中心地）までがこの日は精一杯だった。

次の日朝一番に世田米を出発し、午前九時には気仙郡盛町（現・大船渡市盛町）に着いた。直ぐに警察署と役所に行き、無償で救援したいと申し出た。そして、最も被害の大きい綾里村（現・大船渡市三陸町）へ行くことになった。途中、何度か治療を頼まれ処置はしたが、いずれも重いものだった。その後、多くの傷病者がいる綾里村へ急いだ。到着したのは午後の四時である。世田米を出てから十時間以上たっただろうか。

到着してすぐさま治療を始めたが、この日治療できたのは六名で

あった。傷病者の傷が多数にわたっていたためと、何より傷病者が各地に散らばっていたためである。早速、栄は、傷病者を二か所に集約するよう要請した。一か所は長林寺、もう一か所は民間の家屋である。連日、治療にあたる栄であったが、各地から救援のために医師が続々と駆けつけた。その医師に栄は、「比較的浅い傷であっても、汚泥を飲み、呼吸器や消化器に障害を負っている、また、多くの患者は、家族や住む家を失い心にも大きな傷を負っていることを考えて欲しい。そして、患者やその家族からの金銭の供与額の多少によって治療の軽重をつけるなどしないで欲しい。」という意味の説明をした。目の前の患者一人ひとりの状況だけをみて治療を行うことを強く話した。

栄は寝食を惜しんで、連日朝から夜中の十二時まで治療活動を行った。多くの医師が治療活動に見切りをつけて帰っていく中、栄は七月二十二日まで残り治療にあたった。実に一か月以上もこの地で治療を続けたことになる。

この献身的な救援活動にあたった栄の日記に記されている言葉がある。そのおおよそはこうである。

「私が治療を終え、赤十字社より日当旅費として小切手が送られてきた。しかし、そのままお返しをした。お金をもらおうと思って行っ

たのではない。隣の町に住む仲間への愛というか、自分の中に湧いた激情にも似た感情をおさえることができず、あえて何かの役に立つとしたのです。被害を受けた人々が、家を失い、家族を失い、自ら傷つき、血だらけの体で涙を流しながら語った災害の模様を忘れることはできない。私は、このお金をその被害者に与え、たとえわずかであっても、彼らを守ることに使って欲しい。」

栄は後に岩谷尋常高等小学校（現・岩谷堂小学校）、高寺尋常小学校（現・愛宕小学校）の校医を務め、一九三一年（昭和六年）、七五歳で一生を終えた。

「ボランティア精神」という言葉を普通に耳にする現在であるが、百年以上も前に、この精神を貫いた及川栄という一人の人間が私たちの郷土に存在したことをいつまでも記憶しておきたい。

*参考文献

『岩手の先人 第三集』

岩手教育会岩手県支部